

# お盆 盂蘭盆会(うらぼんえ)



お盆は、7月15日を中心に祖先の霊を迎えて供養する行事です。陰暦の7月15日でお盆を迎える(旧盆)地域と、明治6年新暦(グレゴリオ暦)に切り替えられた際に7月17日頃にお盆を迎えるとした地域、また8月15日にお盆を迎えるとした地域と、大きく3つに分かれます。

発祥は、日本古来の先祖供養と仏教行事の「盂蘭盆会」(うらぼんえ)が融合して生まれたと考えられています。「盂蘭盆会」とは釈迦の弟子のひとり、亡き母親が地獄で苦しむのを見て、母親を成仏させるため釈迦の教えに従い、7月15日に僧に飲食物を施し供養したという仏事のことです。サンスクリット語で「大変な苦痛」の意味を持ち、ご先祖様をその苦しみから救って成仏してもらうための供養としてこの行事が広まりました。

日本では、推古天皇14年(606年)に法興寺で催されたのが最初の盂蘭盆会と言われているようです。奈良・平安時代には公事となり、8世紀頃には夏の祖先供養として風習が定着しました。

迎え火と送り火

迎え火は13日の迎え盆の夕方に、祖先が迷わず家に来れるように、麻の茎や乾燥させたおがらなどを燃やし、家の門の前で焚く火のことです。また、16日の送り盆には祖先の霊を帰すために火を焚きます。或いは、お供え物と一緒に川や海に灯籠を流すところもあります。

## 精霊棚

地域によっても異なりますが、通常は家の中に祖先の霊を迎える精霊棚を設け、ここに花や野菜、団子や灯明などを置きます。最近では仏壇の前に小机を置いたり、仏壇の中に祀ったりすることが一般的になってきました。関東では精霊棚、盆棚、関西では魂棚(たまだな)などと呼ばれます。

## お盆のお供え

先祖の霊が馬に乗って早く家に来れるように、キュウリに箸を挿して馬に見立て、また牛に乗ってゆっくり帰ってもらうように、ナスに箸を挿して牛に見立てて、玄関や門に置きます。ホオズキを飾るのは灯りに見立てて、暗い中を帰っていただくのに道に迷わないようにということです。

お盆に飾られる花は「盆花」と呼ばれますが、ご先祖様が座る場所と考えられており、お盆を迎えるものとして欠かせません。お盆の発祥のときから、その時期に野山に美しく咲いている花を採って手向けたので、元来お盆に使われる花は地域によって様々です。花生産が盛んになった今は、次のような花をお勧めします。

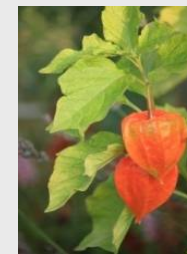
## お盆にお勧めの花

### ホオズキ

ホオズキは漢字で「鬼灯」、または「酸漿」と書きます。ご先祖様の提灯としてはお盆には欠かせないアイテムです。また『源氏物語』では、登場する姫君である玉蔓(たまかずら)の美しく豊かな頬の喩えとしてホオズキが引用されています。

### ハス

仏教では「蓮華(レンゲ)」と称され、極楽浄土を象徴する花でもハスは、仏教と神道の融合文化であるお盆でも開花期が合うこともあり、使われるようになりました。東京都中央卸売市場では、毎年7月第1週にハス市を開催しています。

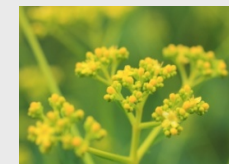


### ミソハギ

こちらも盆花としては欠かせません。地域によりミソハギの花穂に水を含ませて、供え物に水をかける風習があり、それが禊(みそぎ)を連想させることからミソギハギと呼ばれ、いずれミソハギになったと言われます。この花を飾ることで汚れを祓います。

### オミナエシ

漢字では「女郎花」と書きますが、「おみな」は「女」、「えし」は古語のへし「へし(圧)」で、女性を圧倒するほどのオミナエシの美しさから、その名が付けられました。



### リヤトリス

北米原産、昭和初期に日本に渡来したキク科の植物です。まっすぐなラインが特徴的です。

### リンドウ

季節の花として昔からお盆の時期にちょうど野山に咲いていたこと、また、花言葉が「悲しんでいるあなたを愛する」というところから、お盆の花として使われます。

### スターチス

お釈迦様の座禅の足を意味しているとして、お供えには紫色を使うようになったという話もあります。スターチスの紫は発色も良く、お盆の暑い季節にも花持ちが良いことから、お供えの花にお勧めです。